商工観光労働企業委員会会議記録

商工観光労働企業委員長　　衛藤　博昭

１　日　時

令和３年３月２日（火）　　午前１１時００分から
午後　０時０９分まで

２　場　所

第３委員会室

３　出席した委員の氏名

衛藤博昭、今吉次郎、土居昌弘、麻生栄作、成迫健児、玉田輝義、末宗秀雄

４　欠席した委員の氏名

な　し

５　出席した委員外議員の氏名

清田哲也、阿部長夫、太田正美、森誠一、大友栄二、井上明夫、鴛海豊、木付親次、
三浦正臣、古手川正治、木田昇、守永信幸、藤田正道、平岩純子、吉村哲彦、
猿渡久子、小川克己

６　出席した執行部関係者の職・氏名

中部振興局長　磯田健、経営創造・金融課長　馬場真由美、
先端技術挑戦室長　佐藤元彦　ほか関係者

７　出席した参考人の職・氏名

大分経済同友会　クリエイティブ大分委員会
委員長　有松一郎、アドバイザー　尾野文俊、運営委員　津髙守

８　会議に付した事件の件名

別紙次第のとおり

９　会議の概要及び結果

（１）アフターコロナをみすえた大分県観光の再生に向けてについて、参考人から意見聴取を行った。

１０　その他必要な事項

な　し

１１　担当書記

議事課委員会班　　主任　麻生由香里
政策調査課政策法務班　主幹　清水恵子

商工観光労働企業委員会次第

日時：令和３年３月２日（火）１１：００～
場所：第３委員会室

１　開　　会

２　参考人からの意見聴取　　１１：０２～１２：００

（１）アフターコロナをみすえた大分県観光の再生に向けて
　　参考人　大分経済同友会　クリエイティブ大分委員会
　　委員長　有松　一郎　氏
　　アドバイザー　尾野　文俊　氏
　　運営委員　津髙　守　氏

３　閉　　会

別　紙

会議の概要及び結果

衛藤委員長　ただいまから、商工観光労働企業委員会を開きます。

また、本日は多数の委員外議員に出席いただいています。

まず、私から御挨拶を申し上げます。

大分県議会商工観光労働企業委員長の衛藤博昭です。

本日は、アフターコロナをみすえた大分県観光の再生に向けてについて、御意見を伺いたく、大分経済同友会クリエイティブ大分委員会委員長有松一郎様、アドバイザー尾野文俊様、運営委員津髙守様に参考人としてお越しいただきました。

お三方には、大変お忙しい中にもかかわらず、本委員会に御出席いただき、誠にありがとうございます。

本来であれば、私どもが出向いて、御指導を賜るところですが、御足労いただいたことに対し、委員会を代表して厚くお礼申し上げるとともに、本日はどうぞよろしくお願いします。

それでは、委員、委員外議員から自己紹介します。

〔委員、委員外議員自己紹介〕

衛藤委員長　それでは、参考人から自己紹介と、引き続いて、本日のテーマについて御説明をお願いします。

有松参考人　それでは、本日参考人としてお話をさせていただく３人の自己紹介からします。

私は大分経済同友会で、クリエイティブ大分委員会で創造性をいかして地域を再生する、活性化する、あるいは今ある社会問題を解決していくことに取り組んでいる委員会の委員長を務めている有松一郎です。

社会福祉法人大分県福祉会というところで子どもたちの福祉をやっています。その中でも子どもたちにも創造性をということで、この取組をいかしてやっています。

本日はこの後、提言について御説明します。どうぞよろしくお願いします。

津髙参考人　おはようございます。クリエイティブ大分委員会の運営委員をしている津髙です。

私は今、株式会社ＪＲ大分シティの代表取締役をしていますが、２０１２年から２０１５年まで３年間、ＪＲ九州の支社長もしていました。この後、デスティネーションキャンペーンの話をしますが、ちょうど自分が支社長のときに準備だけして、さあ、やるぞというときに本社に呼び戻されたんですが、後ほど説明します。どうぞよろしくお願いします。

尾野参考人　皆さんこんにちは。大分経済同友会常任幹事をしており、この委員会のアドバイザーを務めている尾野文俊です。

鬼塚電気工事株式会社の社長をしています。よろしくお願いします。

有松参考人　それでは、これより提言書の説明に移らせていただきます。冒頭、おわびをしないといけないですが、私どもの手違いで提言書の本文を準備していませんでした。今、急遽事務局の方に御無理をお願いして印刷していただいているので、後ほどお手元に届いたら、ぜひ説明とあわせて御覧いただければと思います。

端折って説明する部分もあるので、少し言葉足らずのところもあるかと思いますが、どうぞその点は御容赦いただき、後ほど資料が届いたら御確認いただければと思います。

本日御説明する提言、アフターコロナをみすえた大分県観光の再生に向けてですが、昨年１０月２３日に、当会の代表幹事、大分銀行の姫野会長、そしてトキハの池辺社長と共に知事のところに伺って、提言させていただいた内容です。

今日は大分経済同友会の担当の幹事、委員会であったクリエイティブ大分委員会が説明に来ていますが、この提言については、そのほかにも産業創出委員会、観光・インバウンド委員会との３委員会連名での提出という形になってい

ます。

さて、後ほど提言１、２で具体的内容を見ていただきますが、その前にこの背景について少し御説明します。

コロナ時代における地域ビジョンの再構築が必要ではなかろうか。ウィズコロナにおける短期的な緊急対策とあわせて、アフターコロナを見据えた大分県の中長期ビジョンの再構築と、県民と一体となった強力な推進が必要であるということで、まずは背景の１として、このコロナ時代が始まったのはちょうど約１年前ですが、そこから大分県も様々な観光再生、あるいは経済の再活性化に向けた取組をしてきていることは御承知のとおりです。大変早い時期に社会経済再活性化緊急推進本部を立ち上げ、また戦略の策定が行われ、その後、ＯＩＴＡ　ＥＡＴ　ＮＯＷキャンペーンとか、ＧｏＴｏに関連して、大分県内新型コロナ対策消費拡大応援キャンペーン等も大分県の取組として実施していただいたのは非常に経済界としてもありがたいことでした。

また、その間、大分経済同友会でも６月にＮＥＷ　ＯＩＴＡ！キャンペーンを実施し、その後、７月にはコロナについての勉強会、そして１０月に本提言を提出と、そのほかにもコロナ禍における様々な勉強会、あるいは政府等に向けた提言等も行っています。

さきほどあった私たちの取組として、一番最初にあがっていたＮＥＷ　ＯＩＴＡ！キャンペーンですが、具体的にはこういったポスターを作りました。まずは、これを昨年６月に大分合同新聞に掲載し、県内各所に掲示しています。

狙いとしては、まず県内でしっかり消費を喚起していこうではないか。そして、大分らしいニューノーマルをみんなで作っていこう。同時に、我々経済界も中心になって、皆さんと一緒に新しいアフターコロナを見据えた中長期的な将来像を構想しようじゃないかという呼びかけのキャンペーンです。

そのようなことを今まで実施してきて、改めてウィズコロナという短期的な緊急対策を、今、国もそして大分県もしっかり実施していただいていますが、あわせて、その先にあるビジョンもしっかりとみんなでつくっていこう。そして、何よりも県民と一体になってそれを推進していくことが大事ではなかろうか。これを背景の１としています。

もう一つ、２０２５年に向けたビジョンを持った観光の復興をということです。今の緊急対策とか、アフターコロナがどうなるかとかをいろいろ考えながら、今、それぞれ御商売をされていますが、観光分野の中期ビジョンとして、一つ、２０２５年という目標を立ててはどうか。ちょうどその年は大阪・関西万博が開催の年であり、ワクチン接種、集団免疫の獲得等、インバウンドが十分に回復している時期にならないか。そこまでにインバウンドが回復していることを想定して、ではその前の年までに、まずは大分県内の観光復興をしっかり手応えのあるものにしていこうではないか。

実は、これまでも大分経済同友会は時期に応じたビジョンを策定してきました。

まずは、２０１０年から２０１５年にかけての中期ビジョンとして、創造的なまちづくりの推進、創造都市実現という提言を行っています。

ちょうどこの時期には大分県立美術館の開館、あるいはＪＲ大分駅のリニューアル、さらにはまちなか、駅南の整備もあわせて、景色が変わっていく時期でした。この間に大分市を、あるいは県都としての大分というまちをしっかり創造性あふれるまちにすることに取り組むことで、大分の魅力が最大限にいかせるようになるのではないかと提言させていただきました。

さきほどちらっと話にも出ていましたが、結果として、この年の７月から９月、おんせん県おおいたデスティネーションキャンペーンが開催される運びとなりました。

さらに、２０１５年から２０２０年の中期ビジョンとして、創造都市という試みを県下全域へ広げようではないかということで、「創造県おおいた」を提唱させていただいています。ちょうどこの期間中は国民文化祭、全国障害者芸術・文化祭、ラグビーワールドカップ、残念ながら延期になっていますが、東京オリンピック

・パラリンピックといったイベントがめじろ押しで、この期間中に文化プログラム等をしっかり推進していき、地方創生に取り組むことで、それぞれのイベントの成功体験がしっかり地域に財産として残っていく、レガシーとなっていくのではないか、そんな提言を実施しています。

そして、２０２０年、改めて２０２５年までの中期ビジョンが必要ではないかということで、さきほども言ったとおり、２０２５年、大阪・関西万博――いのち輝く未来社会のデザインというテーマで開催される万博を一つのアフターコロナのマイルストーンとして位置付け、そこまでに大分県としてどんな取組が必要なのかを中期ビジョンとして考える必要があるのではないかと考え、これを背景として今回の提言へとつながってきました。

改めて、ここから提言ということで具体的に説明を進めますが、提言の１としてカルチャーツーリズムの一層の推進、地域のオンリーワンの魅力をいかすカルチャーツーリズム、観光資源・アート・食文化の相乗効果を磨き上げ、２０２４年のデスティネーションキャンペーンに向けて大分県観光を力強く再生させていく必要があるのではないかという提言です。

その具体的な中身については、提言１として三つのポイントを掲げています。

まず、ポイントの１として、文化や体験を巡るカルチャーツーリズムをもっと推進していこう。

そして２番目、提言の中ではユネスコ創造都市ネットワークへの登録を取り組む市町村があればぜひ支援をと知事にお願いしていましたが、その後、臼杵市が具体的にこの取組について発表したので、今日の段階では臼杵市ということで話を進めます。

そして３番目として、デスティネーションキャンペーンの２０２４年の誘致で、これをまず提言１のポイントとしています。

それでは、改めて提言の中身について御説明します。

まずは文化や体験を巡るカルチャーツーリズムの推進について説明します。

観光は、コロナ禍の回復局面においては、御承知のとおりマイクロツーリズムと言われる近距離の観光から始まり、徐々に拡大していくことが予想されています。

このマイクロツーリズムの特徴ですが、今日は大きく三つあげています。

まずは、移動リスクの低減で、自家用自動車、オートバイ、自転車の利用等、近距離を個別に移動することで移動リスクの低減が好まれている。

また、観光訪問先としては、人混み、集団の回避ということで、有名観光地以外の訪問が増加している。特に自然探索や文化体験が非常に人気となっている。

さらには、宿泊施設の贅沢活用という書き方をしていますが、宿泊施設の滞在時間が非常に延びている。施設内にとどまって、施設内でのんびり過ごすような観光が好まれている。あるいは出かける人も施設周辺でのアクティビティ、そういったものにアプローチしていく傾向がある。これがマイクロツーリズムの特徴です。

では、先般、国が実施していたＧｏＴｏトラベル、この中ではどうだったかということで、今日はアイディエーションというところが取ったアンケートを参考にさせていただきます。これは東京の方に対して取ったアンケートなので、そのまま即、大分県として共感できるかどうかは置いておきますが、まずＧｏＴｏトラベルキャンペーンを利用して訪れた訪問先、あるいは訪れる予定というところでアンケートを取っています。御覧になって分かるとおり、上位はこういったアンケートの常連地域です。これはいつの時代でも上位に来る地域ですが、少し特徴として表れている部分、４位、５位、６位あたりを分析しており、その右側に、ちょっと字が細かいですがいろいろ書いています。

例えば、２０代の方が５位に石川県をあげているのは、金沢２１世紀美術館や茶屋街などが映えスポットとして、あるいはアート体験、文化体験という場として人気があるのではなかろうか。

３０代の長野、宮城については、ウインター

スポーツを楽しむスポーツ・文化体験。さらには温泉や名産品、特に戸隠そばや牛タンなどの食文化体験が地域の良さを堪能したいということで目的地に選ばれている。

４０代、５０代の群馬、静岡、さらには６０代の我らが大分県については温泉地としての共通点があり、温泉体験ということで入っています。

少し変わったところでは、５０代、６０代の神奈川県が３位、４位に入っていますが、これは実は安・近・短、近場でのんびりということで入っているそうです。

さて、グラフが大変見にくくて申し訳ありません。ポイントその２、ニューノーマル時代のラグジュアリー価値の変化ということで、あなたはＧｏＴｏトラベルを利用する場合、どちらの考えに近いですかということで、これは左側に伸びている場合は節約派、右側に伸びている場合が豪華派で、ホテルの宿泊費用、目的地の選定の方法、交通手段のグレード、そして旅行回数のアンケートを取っています。

顕著に表れているポイントとしては、２０代から４０代にかけては旅行の豪華さ、旅行全体としては豪華でありたい、いわゆる満足度の高いものにしたいけど、その豪華さは余りホテルの質や移動手段に求めていないという結果になっています。言い換えると、食であるとか、訪問先での体験だとか、そういった部分に豪華さを求めているという考え方です。

一方、子育て世代ではなく、子育てや家事の一段落した５０代、６０代のニーズは、いわゆる従来型のラグジュアリー旅行と言われる豪華ホテル、そして豪華な移動が旅行のニーズとなっており、若い世代、これからの世代については随分と傾向が変わってきたということが表れています。

さらに、これはＪＴＢ総合研究所が講演会で発表した資料などから抜粋しましたが、随分と旅行の価値が変わってきているのではなかろうかということで、次の新しい時代の旅行価値、新価値についての予測を発表しています。

いろいろと書いていますが、要はこれからの旅行は、旅行そのものが目的であった時代から旅行先で得られる趣味や自己実現、そういったものへのアプローチ手段に変わっていくのではないか。これは従来から言われていた点ですが、コロナを経て、旅行に対する、あるいは観光に対する考え方が随分と変わってきています。

ＧｏＴｏトラベルによって、リスク回避の近距離癒やし旅行を除くと、今後はアートや自然や街並み、旬の味覚や郷土料理、さらにはスポーツ体験等、その時期、あるいはその地域、その場所でしか体験できないオンリーワンの魅力こそが今後の観光の魅力として人を引き付けていくことが様々な角度から表れてきていると考えています。

ついては、大分県としても、ぜひ文化や体験を巡るカルチャーツーリズムの推進、磨き上げがこれからの観光復興のエンジンになるのではなかろうかと思っています。

とはいえ、改めて何か新しいことをする、もちろんそういうことも大事ですが、実はこれまでも大分県においてはアート体験として、今も開催されているｉｎＢＥＰＰＵなどのアートイベント、さらには、これまでも蓄積されてきたアート遺産が県内各所にしっかりとある。食文化体験も言わずもがなで、別府の地獄蒸しのような体験そのもの、さらには大分でしか食べられないふぐのようなもの、さらには旬のものも本当に豊富です。さらに様々な体験としては、別府、あと、竹田のＴＡＯなんかも、実は大分が誇るべきカルチャーツーリズムの大きなコンテンツだろうと思っています。

さらに、御承知のとおりスペースポートなど、これからも大分県は続々といろんな予定があって、またこれは後ほど提言２で詳しくお話ししたいと思います。

さきほど記者発表していたスパークルという新しい自転車のプロチームの設立ですね。もともと大分は自転車文化が非常に豊かなところであり、今後、このプロチームの誕生でさらに発展させていくことが可能になるのではなかろうかとも考えています。実は大分は既にこれだけ様々な魅力を持っている。あと問題は、これら

を結び合わせて大分県版カルチャーツーリズムを物語――ストーリーづくりをしていくことが大切なのかなと思っています。

さて、ここまで提言の１、文化、体験を巡るカルチャーツーリズムの推進ということで説明してきました。

続いて、２番目のポイントである臼杵市のユネスコ創造都市ネットワーク登録支援の説明を続けます。

「人は食べるために旅をする」２０１７年に大分経済同友会講師としてコラムニストの中村孝則氏をお招きした際、その講演の冒頭にいただいた言葉です。私は非常に大きくうなずいたわけですが、実は今や食が観光のキラーコンテンツと言われています。おいしいものを食べるためだったら、人はこれからどんどん旅行に出かける。これは名物を食べに行くというだけではなく、世界規模で見れば、あのシェフの料理を食べたいがために地球半周して人が移動するということが決して珍しい話ではないということです。

さて、大分の食のブランド化、あるいは食の発信については、様々な県産品のブランド化、あるいは２０１８年、ラグビーワールドカップ開催にさき立って発刊されたミシュラン熊本・大分版などでこれまでも十分に発信はされてきました。ここに来て、食文化の分野でユネスコ創造都市ネットワークに臼杵市が挑戦することになっています。これは大分の食を発信するのに大きなアドバンテージになるので、何とか実現していきたい。これまでも食文化について大分経済同友会は取り組んできましたが、今回、臼杵市が手をあげるので、全力で支援していこうとなっています。

改めてユネスコ創造都市ネットワークについて説明します。ユネスコが２００４年１０月に作った制度で、創造性を核とした都市間の国際的な連携によって地域の創造産業の発展を図り、都市、地域の持続可能な開発を目指す事業であると難しく書いていますが、これをやっているのはユネスコの文化部であり、御承知のとおり世界遺産等を取り扱っている部署です。

そして、ユネスコ創造都市ネットワークは七つの分野があって、それぞれの分野いずれかを選択して自治体が登録を目指すというもので、今回、臼杵市が目指すのは食文化です。

既に世界加盟都市８３か国２４６都市が現在登録されていて、国内でも現在９都市が創造都市ネットワークへの取組をしています。

なお、食文化については、日本では山形県鶴岡市のみが現在食文化でのユネスコ登録を終えています。

そして、ユネスコ創造都市ネットワークの加盟実現、もちろんこれは臼杵市にとっては地元のシビックプライドの向上にほかならないわけですが、これを大分県、あるいは日本として見たときには、大分の食をそのままユネスコというブランドの下、ダイレクトに世界に届けることができる。いわゆる和食の一つとしてのふぐであったり、臼杵市の醸造文化ではなく、臼杵市の料理そのものが国際ブランドになる。大分県の食分野の一つが国際ブランド化されていくということで、非常に発信力の高いコンテンツと考えています。

実際、加盟までの道のりはなかなか大変で、２年に１回登録チャンスがあり、ちょうど今年がその登録チャンスの年にあたっています。

昨年１２月に中野市長が加盟を目指すと表明され、全速力で今、取組を進めており、豊かな食の郷土づくり研究会加盟、あるいは創造都市ネットワークの国内組織であるＣＣＮＪへの加盟、山形県鶴岡市への調査派遣、さらに地元の推進協議会の下位組織である臼杵食文化創造都市推進協議会を先般設立しています。

今後、４月にユネスコによる公募が開始され、国内委員会への申請、そしてその中での選考に勝ち残ればユネスコ本部へ加盟認定の申請がなされ、今年１０月にその結果が分かります。

さきほど申した２年に１回の取組なので、もし今年がだめでも、もう一度２０２３年にチャレンジする。不屈の精神で今臼杵市は取組を進めているので、ぜひこの推進にあたっては現在も県の中部振興局に大変な御支援を賜っていますが、引き続き県全体としても、議会の皆さま

方にも御支援賜れればと思っています。
特に予算等については臼杵市は大変御苦労されて、地元協議会も手弁当でやろうとしている状況なので、ぜひそのあたりもよろしくお願いします。

ここまで１、２ということで、提言１の中身についてのポイントを説明してきました。

さらにもう一つ、これらの今作りつつあるコンテンツをただ進めていくだけではなく、まずはここまで頑張ろうよみたいなものが必要ではないかとも考えています。

その中で、今想定できるものがＪＲの大型観光キャンペーンであるデスティネーションキャンペーンです。今、コロナで全国各地、観光どころではないよというところもあって、デスティネーションキャンペーンを目指す大きな動きがないのが実際です。ある意味チャンスだと考え、まだまだみんなが余裕がない今だからこそ、この時期から早く手をあげて２０２４年の誘致に動き出してはどうかと提言の中に盛り込ませていただきます。

そしてまた、２０２４年を大分県にとっての一つの観光のマイルストーンとして、ここでしっかり県内の観光を復活させていくんだ。そして、来る２０２５年、大阪・関西万博のときには世界中から来たお客さんを大分にも呼び込んでいくんだ、そんな流れに持っていきたいということです。

それでは、デスティネーションキャンペーンの誘致については、本日お越しの津髙社長にバトンを渡して説明していただきます。

では、よろしくお願いします。

津髙参考人　津髙です。よろしくお願いします。

大型観光キャンペーン、デスティネーションキャンペーンは、北海道から旅客６社でやっているＪＲグループのキャンペーンですが、主体はＪＲというよりそれぞれの地域とか都道府県になります。

ここに書いている自治体や地元の観光関係者とＪＲグループが協力して日本全国から開催地へ送客する、目的地という意味で使われるデスティネーション、そういう全国規模で集中的に宣伝販売促進を行う国内最大級の観光キャンペーンです。キャンペーンにあわせて、全国のＪＴＢとか、主だった旅行会社が商品を造成し、開催地に送客します。それを機会に受入体制の構築も図っていきます。

近年、どういうところで開催されているかを書いています。２０２０年度は、本当にコロナの影響を受けたのでうまく機能しなかったですが、例えば２０２１年で言うと、震災から１０年ということで、春も夏も東北６県です。冬は絶対京都と決まっています。

２０２２年でいくと、新幹線の西ルート、佐賀の武雄温泉から長崎までつながるのにあわせて、佐賀県と長崎県にデスティネーションキャンペーンを打つのが今後の予定です。

過去、九州はどうやってきたかはここに書いているとおりですが、大分に関しては、さきほどから話題になっている２０１５年の夏です。その前は２０年空きました。

後ほど話しますが、２０１５年のデスティネーションキャンペーンをやるにあたって、「日本一のおんせん県味力も満載」ということで、いろんなマークとかを決めて、デスティネーションキャンペーンを勝ち取るぞと大分県が強い意志で取り組みました。

最近で言うと、２０１９年に熊本で開催されています。少しここに書いていて後ほど話しますが、２０１６年に地震があって、地震の復興を考えて熊本県が行いました。

熊本県の報道では６６億円の経済効果が出たと聞いています。ちょっとこれは額が小さいなと思っています。

前回の２０１５年の大分の話をすると、２０１５年７月から９月の３か月間やりました。２０１２年の夏か秋ぐらいに日本一のおんせん県おおいたをきちっと出して、デスティネーションキャンペーンを絶対にやろうと全国に打って出て、２０１５年にやるぞと決めてやった。それだけ大分県が力を入れたということだと思います。

あわせて、ちょうどその２０１５年の春には県立美術館もでき、何よりもデスティネーショ

ンキャンペーンの成功に向け、山形のデスティネーションキャンペーンへ視察に行きました。うみたまごの橋本さん、それからホテル白菊の西田さんとか観光の関係者の方と視察旅行へ行きました。それに今日いらっしゃっている磯田中部振興局長が当時担当でいらっしゃって、付いてきていただきました。それから尾野社長など、当時、大分のデスティネーションキャンペーンは、観光関係者だけではなく経済界も含めて、とにかく大分の観光を全国に売り出すんだと強い意志があったと私も記憶しています。

ですから、当時を覚えている方もいらっしゃると思いますが、テレビＣＭを作ったり、あとは別府のＢＥＰＰＵ　ＰＲＯＪＥＣＴが３年に１回、混浴温泉世界というアートイベントをやられていましたが、それも通常、春とか秋とかにしますが、デスティネーションキャンペーンにあわせてこのときは夏にやっていただいた。

それから、県でおもてなしのサポーターとかもやって、お出迎えをする準備もしていただきました。

実際、ＪＲグループは何をするかというと、大きなポスターを作り、列車の中に広告を入れました。ＪＲグループのオブリゲーション、やらないといけないのはここまでです。基本的にはどういうことをやります、ああいうのをやりますというのは、県とかそれぞれの市町村が案を練るというところが一番のみそです。

とはいえ、当時、２０１５年はＪＲ九州も「或る列車」という観光列車をつくって、日田と大分の間を結んだり、何よりも私が今仕事をしているＪＲおおいたシティが春に開業した。県はＯＰＡＭという非常に大きなエポックメーキングな施設ができた。そういうタイミングでデスティネーションキャンペーンをやったということ。

私も客観的に見ていて、やはり大分の方が熊本に比べると盛り上がったと思います。さっき熊本が６６億円とか６８億円とか出ていましたが、大分はすごく活気があったと思っています。そういう非常に記憶に残ると言うか、おんせん県おおいたを全国に知らしめたキャンペーンだったなと思っています。

今から２０２４年に向けてやるとすると、ちょうど今の時期から県内でいろんな方向の調整をし、秋から冬に立候補していろいろ調整をやって、恐らく来年の今頃、２０２４年のキャンペーンをどこでやるかが決まります。決まったら前々年、前年と――前年は全国宣伝販売促進会議がありますが、まずはやっぱり決まらないと話にならない。

結局、一番申し上げたいことは、前回はＯＰＡＭとか、駅ビルとか、目玉になるような出来事がちゃんとあって、全国的に分かりやすかった。だから、よそでも手をあげていたけど、大分にぜひやってもらいましょうとなった。

近年、九州で開催したのは１０年前の２０１１年ですが、ちょうど震災の日の翌日が九州新幹線の全線開業でした。２０１５年は駅ビルの開業、ＯＰＡＭがあった。２０１６年の長崎は世界文化遺産の登録があった。熊本は地震の復興というテーマがあった。２０２２年は西九州ルートの開業があるぞ。ということは、今から２０２４年に向けて恐らくいろんなところが手を挙げてくると思いますが、そこで勝ち残ると言うか、認めてもらえるキャンペーンを打てるかどうかが今の一番の大きな課題だと思います。

有松参考人　ありがとうございます。

続いて、提言２ということで次の説明に移ります。

今、お手元に提言書の本体が届いたかと思います。この流れに沿っての御説明になることを申し添えます。

それでは、これより説明を尾野社長よりお願いします。

尾野参考人　それでは、テックツーリズムへの挑戦について話をします。

テックツーリズムというのは造語で、テクノロジーとツーリズムを掛け合わせたものです。

少し資料は飛びます。

ホバークラフトが開業しますが、今、大分で計画されているテクノロジー関連で、集客性のあるものをいろいろ考えてみました。ホバークラフトはなくなって久しいわけですが、なくな

って分かったことは、あれは観光にとても寄与していたよなとよく県外の人たちから言われました。やはりこれは観光資源として有効だったんだなと思い知らされるようになりました。

これが復活するということで、世界でも２か所目、アジアで唯一の観光資源になるなと思います。

そして、先週発表されたターミナルビルですが、これもとてもコンセプチュアルなもので、県立美術館や、磯崎新の建築群や、それから今県内に増えている隈研吾さんの建築群などもあわせて、ひょっとしたら新たなインフラツーリズムといったものも期待できるのではないかと思います。

そして次に、大分空港ですが、コンセッションするわけですから、増築や、リノベーションが期待されます。その際に、やはり今、人の集まる施設というのは、本当にデザイン性が高いというか、さきほどのターミナルのようにアート性の高い建物が増えているので、そういった形でうまく整理すれば、相乗効果を生む施設になるのではないかと思います。

そして、ＡＮＡのアバター　Ｘ　プログラムですが、ＪＡＸＡや大分県が一緒になっていろいろ進めています。これも宇宙での利用を想定した研究や教育の拠点になるということです。

月面をシミュレーションするような施設が整備される計画があるようなので、これもうまくすれば観光施設としても機能するのではないかと考えます。

そして、ヴァージン・オービット社がやろうとしている水平式打ち上げの人工衛星ビジネスですが、今年１月に打ち上げ実験が成功したということで、来年開業が期待されるわけですが、ここで有人宇宙旅行も目指してはどうかということが今回の提言の柱になっています。

では、有人宇宙旅行のビジネスはどうなっているのかと言うと、この表が大分空港以外で水平打ち上げ式を検討している世界のチャートですが、これぐらい実はライバルがいるということです。

では、宇宙旅行のカテゴリーはどんなものがあるのかと言うと、高度８０キロから１００キロぐらいがぎりぎり無重力を体験できるところですが、そのエリアはサブオービットと呼ばれていて、そのサブオービットを目指して、世界の各社がしのぎを削ろうとしています。

そして、高度４００キロ、これが人工衛星がぐるぐる地球の周りを回っている高さですが、ここにＩＳＳ国際宇宙ステーションなどもあります。今まではロシアのロケットに頼るしかなかったのですが、昨年１０月３１日、スペースＸ社が商業利用として初めて、野口聡一さんも連れて国際宇宙ステーションまで行きました。事実上２０２０年が宇宙の旅の始まりと言えると思います。

それから、２０２３年から２０４０年にかけては、月面を観光することも計画されています。火星観光も夢ではなくなるかもしれません。実際、ゲートウエイ財団というところは、２０２７年までに４００キロの軌道上に宇宙ホテルなども造ろうという計画をしています。

ヴァージン・オービット社の親会社のヴァージン・ギャラクティックという会社は、ヴァージングループのリチャード・ブランソン会長が率いている会社ですが、今年中に宇宙旅行を始めようと計画しています。

このような特殊なジェット機にロケットをぶら下げて、上空で切り離して水平打ち上げをするという方式です。１５キロぐらいの高さまで行って、そこで切り離して、ロケット噴射でサブオービットまで行く。そして、４分間ぐらいの無重力を体験し、大気圏に再突入してグライダー飛行で帰ってくるような形です。

このヴァージン・オービットのビジネスは始まっていて、一人当たり２５万ドル、２，６５０万円ぐらい費用がかかるということですが、平均約１週間滞在する。３日間の事前研修のプログラムを受けて、４日目に実際の宇宙旅行をするようです。今、既に７００人以上の登録があり、日本人は１９人だそうです。平均年齢６０歳です。

大分空港も人工衛星だけでなく、宇宙旅行のスペースポートになれば、さらなる経済効果が

期待できるのではないかと思います。宇宙旅行市場は、２０３０年には３０億ドルになると予想されています。

ヴァージン・オービットの日本の募集サイトでは、１８歳以上で年齢の上限はないということなので、皆さんもいかがでしょうか。

日本の動向はどうかというと、宇宙スタートアップ企業のＰＤエアロスペース株式会社はエイチ・アイ・エスやＡＮＡが出資して、初めから宇宙旅行をプロジェクトとして考えている会社です。ジェットエンジンとロケットエンジンを切り替えながらサブオービットの軌道を目指すものです。

そして、ここは実験するにあたって、北海道の大樹町と大分と沖縄県の下地島、この３か所を考えていましたが、残念ながら昨年９月に下地島を実験場として選定してしまいました。

この下地島は、ＪＡＬ、ＡＮＡのジャンボジェットの訓練場所だったところです。ここは２０２５年、２０２６年の運用開始を目指していて、１人当たりの価格は１，４００万円から１，７００万円で、年間１千人ぐらいの人が利用することを想定しています。

ここの資料で分かりましたが、内閣府が宇宙港の決定をするのが令和１２年以降になり、これは民間の動き、世界の動きからかなりずれているので、この辺は日本としても早く決定していかなければ、世界の流れに遅れてしまう可能性もあります。

ここの会社のものは、無人の実験と、有人で商業利用するときには宇宙港を変えるかもしれないので、大分はＰＤエアロスペース社に対して誘致活動をしていくべきではないかなと感じています。

そのほかに、株式会社スペースウォーカーというベンチャー企業も開発しています。ここは垂直打ち上げ、水平で帰ってくるというもので、北海道の大樹町あたりを実験場に考えているようです。

ここで、スペースポートはどんなものが参考になるのかということでちょっと考えてみたいと思います。これはヴァージン・ギャラクティックが使っている水平打ち上げ専用のスペースポートです。ここは安定期に入ると約１００億円ぐらいの経済効果があると言われています。

それから、ヒューストンのスペースポート。ヒューストンの空港は垂直打ち上げの基地等が近くにあるので、水平打ち上げ式を兼用していこうというもので、ここは富裕層をターゲットにして、プライベートジェット機などを使って獲得を狙うようです。大分もぜひそういう富裕層に来てもらいたいと思います。

これが一番大分に参考になるのかもしれません。英国の南西部にあるコーンウォールという場所のエアポートですが、ここもヴァージン・オービットの基地として整備されています。このパース図を見てお分かりのように、ヴァージン・ギャラクティックのロケットも載っているので、ここも有人宇宙旅行を狙っていることが分かります。

ということで、大分空港の有人宇宙旅行のできるスペースポート化を目指してはどうかと思います。日本やアジアで大分にしかないという価値は観光に恐らくイノベーションを与えるのではないかなと思います。うまくすれば、宇宙での移動距離がもう少し長くなれば、４０分で大分ーニューヨークが移動できると言われています。

社団法人おおいたスペースフューチャーセンターも設立されました。このような団体にも有人宇宙旅行の誘致活動をやってもらいたいと思っています。

カルチャーツーリズム、テックツーリズムのいろんなネタを年度別に考えて整理したチャートがこれです。

２０２１年には梅田哲也ｉｎ別府、国東半島の芸術作品が増えてきています。こんなものもアートツーリズムのネタになってくるのではないかなと。

それから、２０２２年には瀬戸内国際芸術祭も開催されますが、２０２１年、臼杵市がユネスコの食文化創造都市の登録を目指すということですね。２０２２年にはスペースポート化。

そして、２０２３年にはホバークラフト。そ

して、ついでにツール・ド・九州・山口が開催されるので、これもぜひ大分を起点とするような、北九州－大分、大分－宮崎というようなコース設定をぜひ誘致したらどうかなと思います。そして、大分空港のコンセッションもあります。

そして、２０２４年にデスティネーションキャンペーンを開催すれば、２０２５年の大阪・関西万博にあわせて有人宇宙旅行も大分で始めて、カルチャー・アンド・テックツーリズムの祭典なども２０２５年を目指してやってはどうかな。そのときには瀬戸内国際芸術祭との共同開催も考えられると思います。

ぜひこのようなことを県議会でも御検討いただければと思います。

以上、予定した時間を超えての御説明になってしまいましたが、さきほど遅れてお配りした大分経済同友会の提言書、アフターコロナをみすえた大分県観光の再生に向けてについての説明でした。

御清聴いただきありがとうございました。（拍手）

衛藤委員長　ありがとうございました。

それでは、これより意見交換、質疑に入ります。

時間の関係もあるので、まずは委員の御質問等を優先したいと思います。

委員の皆さまで御質問、御意見等ありませんか。

玉田委員　どうもありがとうございました。

非常にビジョンが大きくて、急にはいろんなものが頭の中でまとまらないなというのが実際ですが、一番最初に今、ウィズコロナ、そしてアフターコロナという中で、大分県の振興を夢を持って描いていこうという話がありました。大分らしいニューノーマルの構築を一つの柱としてこの中で出しています。この議論の中でどういうことをイメージされているのか、ちょっと今日は具体的で事業的なものがいろいろ積み重なっていたので、その前段がもし議論の中で積み重ねられていれば教えていただきたいと思います。

有松参考人　ありがとうございます。

大分らしいニューノーマルということで、提言の中でも若干触れていますが、大分らしさと言うと、やはり大分に今あるものをまず育てていくことが大分らしさだろうと思います。特に大分に根づいた食、あるいは伝統文化をまず大事にしたい。

そして、もう一つ大分県の特徴ですが、東京ディズニーランドのような年間数千万人が訪れる観光施設はないわけで、ある意味では日頃から密を十分に避けて我々は暮らしています。そういったきら星のような、小さな星をしっかり外から見える化していくことが大事だろうなと。もっと言うと、我々がふだん何げなく生活の一部として扱っているもの、あるいは関わっているものが、実は外から見たときにはすごい魅力的なものになり得る可能性がある。

先般、里山十帖という南魚沼で旅館を経営されている岩佐さん――雑誌「自遊人」の編集長をされている方ですが、経済講演会で大分にお越しいただいて、御講演の中で生活観光という言葉がありました。南魚沼では田んぼがあるのは当たり前の光景ですが、実はその旅館に泊まったお客様に、アクティビティの一つとして、田んぼの中に緋毛氈を敷いて、そこでお茶をたてて飲む催しをやったところ、県外からお越しいただいた方に大変好評であった。また、それがその宿の魅力として口コミになり、さらに集客へとつながった。

実は皆さんも御承知のとおり、田んぼの脇でお茶を飲む、３時に一服、朝も１０時に一服というのは、これは農作業をやっている方にとっては非常に当たり前ですよね。それをきちっとした観光客に伝わるようなコンテンツとして、緋毛氈を敷き、改めて野だてのお茶をそこで供することをアクティビティ化する。ただそれだけで、それまでの生活の一部であったものが非常に魅力的な地域のコンテンツになっていった。これを大分でどのぐらい見つけ出し、掘り出せるかどうかは、正にそこはクリエイティビティにかかっている部分もあるわけですが、時には外部のクリエーターの方にも大分を改めて深掘りしていただくことなどによって、まだまだそ

んな魅力が出てくるのではないか。こういったものをたくさんきら星のごとくもう一回集め直す、あるいは見つけ出す、掘り起こすことが実は今後の大分県らしいアフターコロナ時代の大分県観光の魅力になっていくのではないか、そんなイメージを持っています。

プラス、今出てきたような新しい、今までこの世の中になかったようなもの――宇宙港、スペースポートなどをいかした取組をあわせていくことが大分県らしい観光になっていくのかなとそんなイメージで思っています。

尾野参考人　ちょっと補足を。生活の中の大分のすばらしいものの見え方、見せ方というところにクリエイティビティ、アートやデザインの力がとても有効だと考えています。

麻生委員　今日は本当にありがとうございました。

県議会議長の立場から、何点か申し上げたいですが、今回、カルチャーツーリズムという部分での具体的な提言を御説明いただきました。特に臼杵の食文化は、３万円する本膳料理をお殿様気分で一度食してみたいなと。

また、カルチャーツーリズムに関しては、大分県の総合計画の中に既に表記されています。

一方、テックツーリズムという部分については、まだ総合計画の中には表記がないのではないかな。二元代表制の中で、県民の意思決定をする立場にある県議会の役割として、提言及び行政の監視、チェックをしっかりやっていく機能を果たさなければならない立場からすると、大分経済同友会はいつも知事には提言いただいていますが、今回初めてこういう形で話を伺った次第です。県民の意思を決定する立場からすると、今後とも県議会と連携をお願いしたいと思います。

その中にあって、ホバークラフト、あるいはスペースポート、こういった構想は、ある日突然出てきて、総合計画のどこに組み込むのか。あるいは各種プランのどこにどのようにチェックして入れて、その上で推進していくか。民間事業者――ヴァージン・オービット社等々の誘致とかいう意味では、とにかくスピードが必要であるのは重々承知しているので、そのスピードに我々議会としてどう対応していくかもしっかり今後やっていかなければならない。スピード感という認識を持っていますが、その際にはやはり連携が必要だなということを痛感しています。

例えば、ホバークラフト。宇宙に行こうかという時代、ＳＤＧｓというときに、重油をぽんぽんたくような燃料はどうなのと。そういった部分についても大分経済同友会からの提言をいただいたり、先日のユーチューブでコンペの審査が六つでしたか。多分議員全員が見ていると思いますが、その中に駐車場と入っているけど、ガソリン車の駐車場なのか、電気自動車の駐車場なのか。２０年先というと一気に変わっていると思います。そういった視点も含めて、えっというようなことがたくさんあるわけで、県議会としてはそういうチェック機能とか、政策提言機能を発揮するためには、そういった部分での連携をもっともっと密にしていく必要があろうかと思うので、経済界からも大いに県議会をお使いいただくように議長の立場からお願いし、お礼を申し上げておきます。

衛藤委員長　何かこのまま終わってしまいそうな雰囲気ですが、委員の皆さまはほかによろしいですか。

〔「なし」と言う者あり〕

衛藤委員長　委員外議員の皆さまで御質問、御意見等ありませんか。

藤田委員外議員　本当に夢のあるプランを提示していただき、ありがとうございました。

カルチャーツーリズムという中で、我々議員が中心に大分県地酒・焼酎文化創造会議というＮＰＯを運営していますが、今、こちらで酒蔵ツーリズムを何とか大分に根付かせられないかと考えています。

先般もツーリズムおおいたの幸重会長にお願いしましたが、例えば、にいがた酒の陣であれば、２日間で世界中から十数万人の誘客を成しているツーリズムがあるし、同じ九州でも鹿島市、嬉野市の酒蔵ツーリズム、まさにその名のとおりで、蔵を巡るタイプです。これでもやは

り１０万人規模の集客があるということです。

大分県でもそれぞれの市ごとには、単発で１日限りというイベントはありますが、これを２日間同じ日に開催することで、県内を周遊するツーリズムとして成り立つのではないか。

また、海外向けには、今、加工食品の輸出も手がけているので、例えば、酒のツーリズムをお酒のバイヤーとか海外のレストラン経営者向けに情報発信し、誘客も可能になるということで、結構これは幅広い取組になるんではないかなという気がしています。機会があったら、ぜひ御一緒にそういう分野にも取り組んでいただければとお願いします。

有松参考人　ありがとうございます。

実はさきほどから出ている臼杵市の取組ですが、これはユネスコ登録、食文化として登録する、その大きなコンテンツの一つが醸造文化です。当然この中には臼杵の酒蔵も入っており、大分の醸造文化をユネスコ登録することは、今回代表として臼杵市が臨んでいますが、ここを起点にして、今おっしゃったような酒蔵を結び付けていくことも我々は将来、ユネスコ登録をいかした大分県のさらなるコンテンツづくりになると考えています。当然今もやられているのも承知しているし、それはさきほど言った体験型観光の花形でもあるし、さすがに１か所にお酒を集めて何十万人もの人を集めるというイベントとはまた違ったスタイルで大分はやっていった方がいいのかなとも思っています。ぜひ今後、様々な場面で、まずは臼杵市の応援をしながら、そこを発にして、大分県でこういう醸造文化を巡るいろんな広がりがあるんだと。

さらには別府、あるいは中津、宇佐、日田、こういった地域を訪れた折に、そこを起点にした醸造巡りの旅が各地域にあり、これが大分県の体験、カルチャーツーリズムの一つになっていくように、我々もすごく考えており、また今やっていることについては今後とも皆さまの御支援をいただければと思っています。

衛藤委員長　ありがとうございます。

ほかに御意見、御質問等はよろしいでしょうか。

〔「なし」と言う者あり〕

衛藤委員長　ちょっと私からも。

ちょうど私は今年で４１歳で、１０歳のときに平成になり、ずっと停滞する時代を生きてきた世代でした。２０１４年に大分に帰ってきましたが、駅ビルが新しくなって、それこそ県立美術館ができて、２０１８年には国民文化祭があって、２０１９年にラグビーワールドカップが大分に来て、２０２０年オリンピック・パラリンピックとなります。大分に帰ってきてからすごく将来の目標がある期間が続いて、明日が今日よりもよくなるのじゃないのかなという思いでやってきていて、本当にコロナでこれからの中期の希望とか目標が非常に大切になる中で、ぜひ参考人招致としてこういう話をお伺いできればという思いでお願いした次第です。

やはりすばらしいのは、今の表にあるように一個一個の目標を点ではなくて、そこから線にして、そこからさらに面にしていって、将来に向けて一つの流れを作っていっていただいているところが、この提言のポイントではないかなと思っています。我々もまたこれをしっかり大事にしていければと思っており、それをまた頑張っていきたいと思います。今日は本当に貴重なお話をありがとうございました。

最後になりますが、お礼の御挨拶を今吉副委員長からお願いします。

今吉副委員長　今日は初めて大分経済同友会の方のお話を聞いて本当によかったと思います。

私も中津の観光協会の事務に関わったことがあり、観光というのは実は総合産業ですね。全てのものが人を呼ぶ魅力発信です。実は私も本業ではないですが和傘工房もやっていて、九州で最後の１軒が和傘づくりをやめたときに、やっぱり残そうということで頑張っています。

今回、たまたま尾野社長の御縁があって、隈研吾事務所の話もあり、うちの作品も入るようになりましたが、最終的には観光地で民間が潤うことだと思います。アフターコロナになって、本当にピンチをチャンスに変えるような中長期的な目標を持って、最後はやはり民間が潤うようにやってほしいと思います。今日の宇宙港も

含めて、大分県が本当によくなってほしいと思います。

当然スペースポートになれば、ＪＲおおいたシティも不動産の関係でホテルなどを造るでしょうし、私も本業は不動産で、土地を世話しますからよろしくお願いします。

では、本当に明るい大分に向かって、みんながいい思いができるよう、最後は官と民、行政、議員も頑張るので、ぜひともまた、今後一層手を組んで頑張っていきたいと思います。今日はどうもありがとうございました。（拍手）

衛藤委員長　それでは本日は、お忙しい中ありがとうございました。

以上をもって本日の委員会を終了します。お疲れさまでした。